

P-085

FDG-PET CTにて発見された下垂体腫瘍

広島赤十字・原爆病院 脳神経外科

隅田 昌之、竹下真一郎

【目的】癌の全身スクリーニング、ドックのためFDG-PET CTが近年急速に日本国内で普及している。今回はPETにて下垂体に異常集積が指摘され、MRIにて腫瘍が確認された症例の臨床像を検討する。

【方法】対象は2006年4月から2011年3月の5年間にFDG-PET CTにて異常集積を指摘され、造影MRIにて下垂体腫瘍が発見された4例である。男性2例女性2例、年齢は31-71歳、PETに加え造影MRIと下垂体ホルモン基礎値を精査した。

【結果】1) 全例にて下垂体に増強される腫瘍を認め、画像所見より下垂体腺腫が最も考えられた。2) 腫瘍の最大径は12-18mmであった。3) 内分泌検査では1例にてプロラクチンの上昇、3例では異常はなかった。4) 視力視野含め神経症状は認めなかった。5) 手術や内分泌治療を必要とする症例はなかった。6) 追跡可能だった3例中、2例は変化なかったが、1例にて増大が認められた。

【結論】FDG-PET CTでのスクリーニングは日々増加しており、偶発的に下垂体病変が発見される機会が増加し、正確な鑑別診断と慎重な治療方針の決定が求められる。

P-087

頭蓋底手術を併用した鼻腔副鼻腔悪性腫瘍の2例

松江赤十字病院 脳神経外科

並河 慎也、中岡 光生、大林 直彦、矢原 快太

鼻腔副鼻腔原発の悪性腫瘍は、耳鼻咽喉科を受診した際に発見されることが多いが、頭蓋底や眼窩への浸潤により脳神経外科が携わる機会が増加している。最近われわれが経験した前頭蓋底に浸潤した鼻腔副鼻腔悪性腫瘍2症例について報告する。1例目は52歳女性。左鼻出血を主訴とし、左篩骨洞内に病変を認めた。手術は両側前頭開頭と外側鼻切開により腫瘍、鼻中隔、両側篩板を全摘した。前頭蓋底硬膜に明らかな浸潤は認めなかったが、側頭筋膜を用いて硬膜形成を行った。病理組織診断は嗅神経芽細胞腫であった。現在、後療法は行わず経過をみているが、術後1年10ヶ月で再発はない。2例目は65歳男性。左篩骨洞内の扁平上皮癌(T3N0M0)に対して術前照射、外側鼻切開による腫瘍切除術を実施、術後補助療法を行った。2年後に再発し、前頭蓋底、左眼窩内への浸潤を認めた。頭蓋内には浸潤はなく、根治可能と考え、両側前頭開頭と外側鼻切開により腫瘍、鼻中隔、両側篩板、蝶形骨の一部、左眼窩内容などの可及的一塊の摘出を行った。眼窩内には遊離腹直筋皮弁を充填した。前頭蓋底硬膜に明らかな浸潤は認めず、両側嗅神経切断後、縫合した。術後切除断端部にサイバーナイフ治療を行ったが、術後18ヶ月で頭蓋内浸潤を認めた。いずれの症例も、耳鼻咽喉科、形成外科との連携により、合併症なく、安全に治療が遂行できた。

P-086

当院における75歳以上tPA症例の検討

福井赤十字病院 脳神経外科¹⁾、
福井赤十字病院 神経内科²⁾

織田 雅¹⁾、早瀬 睦¹⁾、水谷 朋彦¹⁾、中村 威彦¹⁾、
波多野武人¹⁾、榎本 宗一²⁾、北島 和人²⁾、高野誠一郎²⁾

【目的】tPA静注療法を行う上で発症時間がはっきりしていることが投薬を行う上で重要である。そのため発症形式として心原性が多数を占める。さらに若年者より高齢者が多い。一方tPA慎重投与群は75歳以上とされているため、高齢のためtPA投与がためられることがある。今回当院におけるtPA症例での75歳以上(A群)未滿(B群)でのmRS、出血合併症を比較した。

【方法】2005年10月から2011年1月末までのtPA症例82例を75歳以上(A群)未滿(B群)の2群として、投与までの時間、施行前後のNIHSS、mRS、出血合併症について検討した。

【結果】年齢はA群75-93歳(平均83歳)、B群38-74歳(平均64歳)であった。性別はA群男性22例女性21例で、B群は男性29例女性10例であった。発症から投与までの時間はA群で90-180分(平均146分)、B群で83-180分(平均150分)であった。投与前NIHSSはA群で4-25(平均14)、B群で1-24(平均11.5)であった。投与後NIHSSはA群で0-26(平均10)、B群で0-25(平均7.9)であった。3か月後mRSはA群は0が6例、1が8例、2が6例、3が7例、4が10例、5が2例、6が4例であった。B群は0が13例、1が6例、2が5例、3が7例、4が4例、5が1例、6が3例であった。出血合併症はA群が7例、B群が12例であったが、症候性を呈したのはAが2例、Bが1例であった。

【考察】3か月後の機能予後に年齢は一つの因子として挙げら、それをもとに75歳以上のtPA症例は慎重投与群として位置づけられている。当院でも退院時mRSは75歳未滿の方が良好であったが、75歳以上が著明に75歳未滿と比べて出血合併症が多いというわけではないが、画像評価、血圧管理等を含め、十分な観察のもとで慎重に投与することで良好な結果が期待できる。

P-088

嚥下調整食に嗜好を取り入れた食欲増進への取り組み

徳島赤十字病院 看護科¹⁾、徳島赤十字病院 栄養課²⁾

塩浦 祐里¹⁾、木田佐智子¹⁾、楠本 真央¹⁾、黒田 弘子¹⁾、
栢下 淳子²⁾

【はじめに】脳血管疾患による嚥下障害患者に対し早期の嚥下スクリーニングや嚥下訓練を実施している。しかし、嚥下調整食を拒否される場面もある。そこで嗜好を取り入れ食欲にどのように影響するのを検討した。

【方法】・対象：JCS 0~3 脳血管疾患による嚥下障害患者3名
・期間：平成22年8月~12月
・調査方法：・経口摂取開始前に嗜好調査を実施・独自に作成した調査用紙を使用。摂取状況・感想を記録。調査期間は摂取開始日を含む7日間。
・分析方法：調査用紙から摂取量・患者の感想を内容分析する。
・倫理的配慮：倫理委員会医療審議部会の承認を得た。

【結果】A氏：好物を中心とし味付けを濃くした。B氏：嗜好調査で要望なし。全粥きざみ食へ移行後は9~10割摂取。C氏：嗜好調査で要望なし。嚥下調整食1では「もっと形があるものがいい」。

【考察】A氏 嗜好を取り入れ食欲増進につながった。ミキサー食に飽き、食材そのものを嚥下して味わいたいという欲求が出た。B氏 嗜好を反映できた。嚥下調整食は全粥きざみ食と食材は同じ。外観や食感が食欲に影響したと考えられた。C氏 嚥下状態から形態を変更できず嗜好を反映できなかった。限られた形態でも食べる楽しみを感じながら訓練できるような援助が必要だと考える。

【結論】・嚥下調整食に嗜好を取り入れた方が食欲増進につながる。

・患者は味付けや食材よりも形態を重視している。
・速やかに次の段階の食事に移行させていく必要がある。